

第253回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（6）

福本和夫 略年譜・著作一覧

略年譜

福本和夫『革命運動裸像ー非合法時代の思い出』（こぶし書房、2004年）、石見尚『福本和夫ー『日本ルネッサンス史論』をめぐる思想と人間』（論創社、1993年）、清水多吉『柳田國男の継承者 福本和夫ー「コトバ」を追い求めた知られざる子弟の交遊抄』（ミネルヴァ書房、2014年）、『福本和夫研究 第5集ー著作50年からみたその人と業績の一端』（1983年、高野進発行）掲載の年譜などを参考にして、再編集・補足した。

1894（明治27）年

7月4日 鳥取県東伯郡下北条村田井に、父信蔵、母もんの三男として生まれる。

1902（明治35）年 8歳

北条尋常高等小学校入学。

1909（明治42）年 15歳

北条尋常高等小学校卒業。鳥取県立倉吉中学校（現倉吉東高校）に入学。前田寛治は中学の同級生。

1914（大正3）年 20歳

3月、倉吉中学校卒業。9月、第一高等学校英法科入学。

1917（大正6）年 23歳

3月、第一高等学校卒業。9月、東京帝国大学法学部政治学科入学。吉野作造から政治史、支那革命史、新渡戸稲造から経済史を学ぶ。夏目漱石、イプセン、ラッセルらを愛読。

1920（大正9）年 26歳

3月、東京帝国大学卒業。新設の松江高等学校教授に就任。唯物史観の研究を開始。

この頃、島根県八束郡長・吉村政次郎の長女・艶と結婚（わずか9ヶ月で離婚、その後に生まれた長女・逸子は郷里で養育され、和夫が1942年に釈放後は終生、父の面倒を見る）。

1921（大正10）年 27歳

11月、前田寛治が榛名丸で横浜港を出発、翌年1月にパリ到着。

1922（大正11）年 28歳

3月、文部省在外派遣研究員として米英独仏4か国の留学のため春洋丸でサンフランシスコに向けて横浜港を出発。

5月（春か夏という説もある）、コルシュの誘いでドイツ・チューリングゲン州イルメナウで開催された「第1回マルクス主義研究週間」に参加。コルシュ、ルカーチ、ウィットフィーゲル、ポロック、ヴァイルら後の「フランクフルト社会研究所」の主要メンバーを含めた約20人の集合写真が残されている（後にスパイとなるゾルゲの姿もある）。在独時代、福本は『マルクス主義の哲学』（1923年）を執筆中のコルシュにマルクス主義の個人教授を受け、ルカーチから『歴史と階級意識』（1923年）初版本を贈呈された。

5月下旬、ロンドンのハイゲート墓地でマルクスの墓の写真を撮る。

1923（大正12）年 29歳

5月、ベルリンからパリへ。前田寛治が駅（パリ北駅か）に出迎える。福本が帰国するまで、前田と緊密な交流

1924（大正13）年 30歳

1月～8月、パリにて初期三部作の草稿をまとめる。

9月、2年半の留学を終えて帰国（香取丸でマルセイユから神戸へ）。船上で宇野弘蔵と唯物史観と経済学の関係について議論（東大退官後に法政大学に勤務した宇野は、日本ルネッサンス史論の重要な一部分となるマニュファクチュア論『日本捕鯨史話』（1960年）の法政大学出版会からの刊行に尽力）。帰国後、郷里で静養か。

10月～11月、仙台で論文執筆。

12月、雑誌『マルクス主義』にデビュー論文「経済学批判のうちにおける『資本論』の範囲を論ず」を投稿。以後、論壇で注目される。

1925（大正14）年 31歳

1月、山口高等商業学校教授に就任。

2月、「隔絶」「分離」と訳されていた「Entfremdung（エントフテムドゥング）」に漢語「疎外」をあて、「人間的自己疎外」「人間疎外」を用いる。

この頃、一時帰郷（逸子と再会するのは17年後）。

8月、前田寛治がパリから帰国。

10月、雑誌『マルクス主義』に前衛結成論「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか 我々はいまそのいかなる過程を過程しつつあるか—無産者結合に関するマルクスの原理—」を掲載。

11月、京都帝国大学学友会の招きで2日間にわたり講演。

従来「止揚」と訳されていた「aufheben（アウフヘーベン）」に「揚棄」という訳語をあてる。

12月、三井合名会社調査役・星野正敏の三女・幸子と結婚（翌年7月頃、協議離婚）。

1926（大正15）年 32歳

2月、デビュー作『社会の構成並に变革の過程』を出版。雑誌『マルクス主義』に山川均批判の論文「山川氏の方向転換論より始めざるべからず（一）」を掲載（「二」は5月号）。

3月末、山口高等商業学校を休職（事実上の辞任）。本郷の菊富士ホテルに止宿。

4月、 коммуニスト・グループに加入し、『マルクス主義』副主筆となる。日本共産党再建準備委員会の委員として活動。

5月、個人雑誌『マルキシズムの旗の下に』創刊（12月まで6巻を発行）。

夏頃（6月か7月）、 коммуニスト・ビューローへ「入党」、政治部所属。

7月末か8月初～8月末、目の病気を治すために帰郷。

12月、山形県五色温泉にて党再建大会開催。常任中央委員政治部長に選任（委員長は佐野文夫）。議会解散請願運動を口実に。本富士署に1週間拘留。以後、常尾行をつけられる。

山川均の「方向転換」論に対して、福本の「分離結合」論、いわゆる「福本イズム」が一世を風靡。

1927（昭和2）年 33歳

1月、後に「フィクサー」と呼ばれる長男・邦男が誕生（母は幸子）。

2月、常尾行をまいて日本脱出しモスクワへ。コミンテルン本部にて日本問題討議に参加。「27テーゼ」による福本イズムと山川イズムの断罪。

3月、雑誌『改造』第9巻第3号に北浦千太郎「アンチ福本イズム」掲載。福本思想を初めて「福本イズム」と命名。

10月、モスクワより帰国、日光での報告会議に参加。

12月、福本イズムの失墜後、大井工場を対象とする細胞員として活動。

この年、前田寛治が『福本和夫氏像』（鳥取県立美術館所蔵）を描く。

1928（昭和3）年 34歳

3月、3・15事件、大検挙が始まる（検挙者は約1600人、起訴者は約480人）。大井駅近くで特高から声をかけられるが逃走。

6月、大阪にて党再建活動中、東京の連絡員・袴田里見と落ち合う場所で逮捕。市ヶ谷未決刑務所に収監。

1930（昭和5）年 36歳

4月、前田寛治が鼻孔内腫瘍により夭折（享年33）。

1931（昭和6）年 37歳

6月、3. 15検挙組、4. 16検挙組の合同公判開始（東京地裁）。「党活動を自ら暴露する」という法廷委員の方針に反対。

1932（昭和7）年 38歳

7月、合同公判の最終陳述。コミンテルン「32テーゼ」が法廷に伝わる。

10月、懲役10年、未決通算400日の判決、東京高裁へ上告。

1933（昭和8）年 39歳

5月、第2審裁判が開始。

6月、佐野学・鍋島貞親の転向声明。以後、転向が相次ぐ。

1934（昭和9）年 40歳

12月、上告棄却。懲役10年、未決通算400日。20日、北海道釧路刑務所に収監。

1936（昭和11）年 42歳

5月、獄中で日本ルネッサンス史論を着想。

1938（昭和13）年 44歳

1月、札幌控訴院・熊谷検事に、コミンテルン・日本共産党批判を表明。

1940（昭和15）年 46歳

2月、紀元2600年恩赦で1年10ヶ月減刑。

4月、千葉刑務所へ移送。

9月、小菅刑務所へ移送。

1941（昭和16）年 47歳

6月、獄中で母死去の報を受ける。

8月、娘・逸子が倉吉高等女学校（現倉吉西高校）で教わった国漢の先生に依頼して差し入れられた北斎「富岳三十六景・凱風快晴」の富士山が二つの二等辺三角形からなることを発見。北斎の幾何学的手法がフランス印象派に影響を与えた理由を説く端緒となる。

12月、刑期満了。予防拘禁のため東京豊多摩刑務所予防拘禁所に移送。日本共産党からの離党を表明（偽装転向）。

1942（昭和17）年 48歳

1月、長女・逸子と予防拘禁所で面会。

4月、東京控訴判決で釈放決定、24日に出獄。東京保護観察所の保護観察に付され、憲兵、警察、保護観察所から監視。

5月、柳田國男の高弟である橋浦泰雄の紹介で柳田邸を訪問。その後、17年ぶりに帰郷。倉吉千刃稲扱き生産の歴史・技術を実地で調査研究。

7月、長女を連れて上京。

8月、郷土の方言や民俗について、柳田國男に教えを受ける。

11月、柳田國男の紹介で、尾佐竹猛から『日本近世学芸復興期の総合、比較研究』のための長い序文をもらう。

1943（昭和18）年 49歳

千葉県の稲毛、西千葉に移住。保護観察下で窮乏生活を送る。『抜け参りの研究』など、友人やその弟の名前を借用して『抜け参りの研究』などを刊行。

1944（昭和19）年 50歳

千葉の空襲が激しくなり、内房の保田（現鋸南町）に疎開。

1945（昭和20）年 51歳

8月、終戦により監視がなくなり自由の身となる。

9月、米艦ミズーリ号における降伏文書調印式を自宅から遠望。

1946（昭和21）年 52歳

1月、荻原井泉水を北鎌倉に訪ねる。

10月、竹越与三郎に『日本ルネッサンス史論』第2時草稿について話し、「飢腸奇策を出す」と喜ばれる。

12月、北大路魯山人を北鎌倉に訪ねる。

1947（昭和22）年 53歳

4月、藤沢八州台のグリーンハウスへ転居。

日本ルネッサンス史論の一環として、『北斎の芸術』（6月）、『北斎と印象派の人々』（12月）を刊行。

1948（昭和23）年 54歳

4月、前年に日本浮世絵協会に提案した「北斎百年祭」が日本各地で、次いでパリでも開催。

日中友好協会藤沢支部創立に尽力し、協会幹事となる。

1949（昭和24）年 55歳

10月、『日本農業における資本家的経営発展の略図』、『日本近世の文化革命—日本近世学芸復興論序説』を刊行、徳田（球一）主義と封建派を批判。

1950（昭和25）年 56歳

1月、日本共産党に復党。国際派と所感派の分裂による激烈的な党内闘争に対抗して、日本共産党の根本的変革による前衛党づくりを目指した統一協議会を組織（国際派分派）。

6月、参議院選挙に全国区候補として立候補予定だったが、国際派分派を理由に急遽、鳥取選挙区にまわり落選。

1951（昭和26）年 57歳

9月、GHQ命令で逮捕。日共全国オルグ団長という根拠のない容疑で万世橋留置場に23日間拘留。

1952（昭和27）年 58歳

12月、『革命は楽しからずやー回顧録・霧笛編』刊行

1953（昭和28）年 59歳

8月、藤沢市西富大門（現、大鋸）に転居。

1954（昭和29）年 60歳

6月、『日本の山林大地主』を刊行、51年綱領（武力解放の方針）の根拠となる山村の封建的支配の政治的虚構性を証明。

10月、国立近代美術館にて講演「前田寛治の人と藝術」

11月、藤沢の鵠沼海岸にニエアル（聶耳、中国国歌の作詞者、1935年に遊泳中に溺死、享年23）記念碑が建立、落成式に建立提案者として挨拶。

1955（昭和30）年 61歳

茨城の常東農民組合派と提携。

1956（昭和31）年 62歳

早春、茨城の新利根開拓農協による共同経営を訪問調査。

1957（昭和32）年 63歳

3月、前年2月のソ連共産党第一書記フルシチョフによるスターリン批判を受けて、論文「スターリン批判の自主性を確立せよ」を発表。

春、かつての論敵、山川均の自宅を30数年ぶりに訪問。夫人の菊栄（社会主義者、婦人運動家、労働省初代婦人少年局長）は福本を警戒して不愛想だったが、均が好々爺となっていたことに驚く。

9月、統一協議会を受け継ぎ農民懇話会を結成、同人雑誌『農民懇話会』を刊行。

11月、雑誌『真相』に「自主性喪失の責任者は誰か」を連載開始。

1958（昭和33）年 64歳

1月、1924年に留学からの帰国の船で一緒だった宇野弘蔵と再会、スターリンの一国社会主義について意見交換。

3月、山川均の逝去を悼み「日本における社会民主主義の父」と追悼（享年77）。

6月頃、息子の福本邦夫が第2次岸信介内閣で椎名悦三郎官房長官の秘書官に就任したとき、和夫は岸首相と椎名官房長官に

宛てて「反動内閣ノ秘書官二息子ヲスルコト絶対反対 福本和夫」という電報を打つ。

7月、スターリン主義批判を拡大するため、雑誌『農民懇話会』を雑誌『マルクス主義公論』に切り替えて創刊。

この頃、日本共産党から除名。

1959（昭和34）年 65歳（この当時の男性の平均寿命）

1月、「自主性喪失の責任者は誰か」連載を『マルクス主義公論』に移す。

1960（昭和35）年 66歳

5－6月、安保反対闘争デモが繰り広げられる中、『マルクス主義公論』は全学連を支持（日本共産党は極左冒険主義と批判）。

7月、『日本捕鯨史話』刊行。

1961（昭和36）年 67歳

1月、日本工業新聞に「日本工業の黎明期」を連載開始。

3月、製茶業の発展について調査。

5月、運河の東西比較を研究。

9月、詩余と自由律について荻原井泉水と意見交換。

1962（昭和37）年 68歳

6月、『日本工業の黎明期－日本マニュファクチュアの総合・比較研究』刊行

10月、『革命運動裸像－非合法時代の思い出』刊行

1964（昭和38）年 69歳

5月、『日本ルネッサンス史論』（本文1400枚）脱稿。1936年の着想から28年。

1965（昭和40）年 71歳

7月、季刊『日本ルネッサンス研究』を同人で発行（～1968年12月第10号）。ルネッサンス期の印刷術と出版を研究。

1966（昭和41）年 72歳

3月、『日本ルネッサンス史論』第4次草稿（最終稿）。

9月、倉吉市の倉吉タイヨーにて「福本和夫、引田逸牛二人展」開催（引田逸牛1901－1996は中北条村（現北栄町）江北出身の日本画家）。

11月、専修大学にて「社会主義運動雑感」と題して講演。

12月、藤沢市図書館にて講演「私の日本文化史研究について」。

1967（昭和42）年 73歳

7月、茅ヶ崎文化講座にて講演「私の浮世絵研究について」。

9月、藤沢中央図書館で獄中ノート5冊を展示。

10月、ライフワーク『日本ルネッサンス史論—1661年—1850年に至る日本ルネッサンスの比較・総合研究 総論編』（828頁）刊行。朝日放送テレビにて「日本この百年—吹きまくる弾圧の嵐」に出演。

12月、東京大学総長・大河内一男から梶が描かれたホガースの銅版画を贈られる。

1969（昭和44）年 75歳

9月、『日本ルネッサンス史論 続編15章』刊行。

9月、『梶と人生』刊行。

1970（昭和45）年 76歳

1月、宇野弘蔵から『資本論五十年』を寄贈。福本のマルクス主義の方法を放言の材料とされたことに対して、電話で抗議。

4月、松江高校の同窓会に参加、萩で反射炉を見学。

1971（昭和46）年 77歳

7月、喜寿記念『復刻自註 福本和夫初期著作集』第1巻刊行。

1972（昭和47）年 78歳

2月、日本ペンクラブ入会（12月、退会）。

9月、『初期著作集』第4巻『未発表獄中ノート抄』刊行、全4巻完結（第2巻『経済学批判の方法論』、第3巻『無産階級の方角転換』）。

10月～11月、藤沢市中央図書館にて「福本和夫先生著作四十八年展」開催。

1973（昭和48）年 79歳

6月、『毛沢東思想の原点』刊行

12月、東京神田・学士会館で『毛沢東思想の原点』刊行記念会を開催。

1974（昭和49）年 80歳

11月、フランクフルト学派の拠点であるフランクフルト・アム・マイン大学付設「社会研究所」に、城塚登を通じて著書を寄贈（「社会研究所」の名称は福本和夫の示唆による）。

1975（昭和50）年 81歳

7月、蔵書四千冊、論文などを藤沢市立文書館に寄託（現在は遺品とともに神奈川近代文学館に遺贈）。「福本和夫文庫」設置。

1976（昭和51）年 82歳

12月、『日本ルネッサンス史論の補足・総括編』刊行。自分のライフワークは終わったので、今後は随筆を書くことにしたい、と語る。

この年、「福本和夫著作活動50周年記念」集会開催（清水多吉、廣松渉らの発案、発起人代表は城塚登）。

1977（昭和52）年 83歳

3月、藤沢江ノ電デパートで「福本和夫書道展」開催。

10月、「日本ルネッサンス研究所」設立。江ノ電デパートで「ふくろう展」（300点出品）、「福本和夫著作50年展」開催。

1978（昭和53）年 84歳

6月、NHK番組「日曜美術館－前田寛治」に出演。

1979（昭和54）年 85歳

3月、NHK番組「私の自叙伝」で「獄窓14年」を語る。

8月、八木紀一郎により『日本ルネッサンス史論』第2章「日本ルネッサンスの時代性・階級性・革新性」が英訳され、日本ルネッサンス研究所から刊行。

11－12月、「前田寛治没後50年記念展」（新宿・小田急百貨店、兵庫県立近代美術館）に福本和夫像を出品。

1980（昭和55）年 86歳

10月、江ノ電デパートで「書とふくろう展」開催。

1981（昭和56）年 87歳

7月、米寿を祝う会を藤沢の時宗総本山・遊行寺書院で開催。

米寿記念として『日本工業先覚者史話』刊行。

10月、北条町中央公民館にて「福本和夫米寿、引田逸牛卒寿いところ展」開催。

1982（昭和57）年 88歳

9月、『カラクリ技術史話』刊行。

12月、『フクロウ－私の探鼻記』刊行。

1983（昭和58）年 89歳

4月、食事ができなくなる。

8月、藤沢市立文書館「福本和夫のすべて展」開催。

11月16日、肺炎のため自宅で逝去。藤沢市西富の市営墓地に葬られる。

2008（平成21）年～2011（平成23）年

『福本和夫著作集』（こぶし書房、2008～2010年、全10巻）の完結を受けて、鳥取県北栄町図書館「福本和夫を識る」講座開催（第1回「福本和夫と郷土」、第2回「福本和夫の生きた時代」、第3回「福本和夫と柳田國男をつなぐもの－低い目線でもものを見ること」）。

著作一覧

福本和夫『革命運動裸像－非合法時代の思い出』（こぶし書房、2004年）、石見尚『福本和夫－『日本ルネッサンス史論』をめぐる思想と人間』（論創社、1993年）掲載の著書一覧に基づき、『県立神奈川

近代文学館所蔵文庫目録5 福本和夫文庫目録』(財団法人神奈川文学振興会、1989年)によって再編集・補足した。なお、カッコ付の著作は、ペンネーム(北条一雄)、中学時代の同級生の名(吉岡永美)、婿養子に入った実弟の名(多賀義憲)で刊行された。

社会の構成並に変革の過程	白揚社	1926年2月
唯物史観と中間派史観	希望閣	1926年3月
無産階級の方角転換(北条一雄)	希望閣	1926年4月
経済学批判の方法論	白揚社	1926年6月
理論闘争(北条一雄)	白揚社	1926年11月
方角転換(北条一雄)	白揚社	1927年1月
経済学批判のために	改造社	1928年4月
唯物史観のために	改造社	1928年4月
晩年の新井白石(多賀義憲)	北光書房	1943年11月
東洋古兵法の精神(多賀義憲)	北光書房	1943年11月
技術史話雑稿(多賀義憲)	北光書房	1943年11月
抜け参りの研究(吉岡永美)	北光書房	1943年11月
漂流船物語の研究(吉岡永美)	北光書房	1943年11月
印度復興の理念(吉岡永美)	北光書房	1944年4月
北斎の研究 上	北光書房	1944年7月
新日本への提言	創建社	1946年2月
続 獄中14年	創建社	1946年4月
獄中14年	創建社	1946年5月
弁証法例話	北光書房	1946年9月
北斎の芸術	北光書房	1947年6月
北斎と印象派の人々	彰考書院	1947年12月
唯物史観と経験批判論	北光書房	1948年6月
北斎と写楽	日高書房	1949年2月
日本農業における資本家的経営発展の略図	解放社	1949年10月
日本近世の文化革命—日本近世学芸復興期論序説	潮流社	1949年10月
日本農村の階級区分	理論社	1952年10月
革命は楽しからずや—回顧録・霧笛編	教育書林	1952年10月
唯物論者のみた梟	出版東京	1952年10月
人間毛沢東	日本出版協同	1953年6月
日本の山林大地主	青銅社	1954年6月
北斎と印象派・立体派の人々	昭森社	1955年1月
新・旧山林大地主の実態	東洋経済新報社	1955年6月

戦後日本の農林業問題	弘文堂	1959年9月
史伝 藤沢次郎清親	鎌倉文化研究会	1960年4月
日本捕鯨史話	法政大学出版局	1960年7月
日本工業の黎明期ー日本マニファクチュアの総合・比較研究	未来社	1962年6月
革命運動裸像ー非合法時代の思い出	三一書房	1962年10月
日本ルネッサンス史論ー1661ー1850年に至る日本ルネッサ ンスの比較・総合研究 総論編	東西書房	1967年10月
書味真髓	フジ出版社	1968年6月
北斎と近代絵画	フジ出版社	1968年8月
自主性・人間性の回復を目指して45年	マルクス主義公論	1969年8月
日本ルネッサンス文人の煎茶会	教友社	1969年8月
日本ルネッサンス史論 続編15章	日本ルネッサンス史学会	1969年9月
梟と人生	マルクス主義公論	1969年9月
復刻自註 福本初期著作集	こぶし書房	
第1巻 社会の構成並に変革の過程		1971年7月
第2巻 経済学批判の方法論		1971年10月
第3巻 無産階級の方角転換		1972年2月
第4巻 未発表 獄中ノート抄		1972年9月
日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴	法政大学出版局	1972年10月
毛沢東思想の原点	三一書房	1973年6月
福本和夫蔵硯図録	松本健二	1974年8月
毛沢東思想と路線闘争	三一書房	1974年8月
老子・孫子と太史公	日本ルネッサンス研究所	1975年12月
日本ルネッサンス史論の補足・総括編	和田一雄	1976年12月
革命回想(再編集・復刻)	インタープレス	
第1部 非合法時代の思い出		1977年2月
第2部 昭和の大獄		1977年2月
第3部 自主性・人間性の回復をめざして		1977年3月
私の辞書論	河出書房新社	1977年9月
日本ルネッサンス史論(復刻)	インタープレス	
第1巻 日本ルネッサンス誕生		1977年10月
第2巻 諸学復興		1977年11月
日本捕鯨史話 新装版	法政大学出版局	1978年8月

福本和夫書簡抄 日本ルネッサンス研究所 1978年10月

Introduction to the Renaissance in Japan

日本ルネッサンス研究所 1979年6月

書のたのしみ 日本ルネッサンス研究所 1980年12月

日本工業先覚者史話 論創社 1981年7月

カラクリ技術史話 フジ出版社 1982年9月

フクロウー私の探梟記 法政大学出版局 1982年12月

日本ルネッサンス史論（復刻）

法政大学出版局 1985年7月

福本和夫自伝Ⅰ 革命は楽しからずやー回顧録・霧笛篇（復刻）

こぶし書房 2003年12月

福本和夫自伝Ⅱ 革命運動裸像ー非合法時代の思い出（復刻）

こぶし書房 2004年3月

福本和夫著作集

こぶし書房

第1巻 マルクス主義の理論的研究Ⅰ 2010年7月

第2巻 マルクス主義の理論的研究Ⅱ 2010年11月

第3巻 初期文化史研究 2008年11月

第4巻 農林業論 2009年4月

第5巻 葛飾北斎論 2008年2月

第6巻 中国思想の位相論 2009年7月

第7巻 カラクリ技術史 捕鯨史 2008年7月

第8巻 獄中思索 私の辞書論 2011年3月

第9巻 日本ルネッサンス史論 2009年11月

第10巻 自主性・人間性の回復をめざして

2010年3月

福本和夫稿 伯耆北條地方の訛言・方言・略語考（柳田國男の読後メモ付き） 鳥取県北栄町教育委員会編集 2012年1月

福本和夫文庫目録（収蔵文庫目録5）

神奈川近代文学館 1989年3月

<内容>

福本和夫旧蔵書及び原稿・書簡等の目録

<収録点数>

特別資料3155点（原稿156点、書簡2403点、その他の資料596点）

図書2321点 2747冊（うち、著書・作品収録図書71点77冊）

雑誌47誌169冊

<おもな資料>

ライフワークの『日本ルネッサンス史論』の原稿とその草稿の
獄中ノート、『日本近世の文化革命』等の原稿・草稿、福本和
夫あて書簡、書、遺品等、著書をはじめ執筆のための参考図
書、執筆誌を中心とした雑誌